

映画『ハンナ・アーレント』のこと

【えびな9条の会・会報 投稿原稿】

下山房雄

昨年岩波ホールで上映されたマルガレーテ・フォン・トロッタ監督の映画「ハンナ・アーレント」は、連日大入り満員で話題になり、新聞の映画評でも好評を得ていた。それで観たいとは思っていたのが、見損なっていたところ、年が明けてからも東京、神奈川のいくつかの映画館で上映があり、「えびな九条の会」の1月世話人会議でも話題になったので、新宿シネマ・カリテまで出かけて鑑賞した。しかし期待して観たわりには、理性的にも感性的にもそれほどの魅力を私は感じなかった。

昔（四半世紀前）観たトロッタの『ローザ・ルクセンブルク』は、第二帝政廃止→ワイマール共和国と成るドイツ革命（1918 - 19）の最終場面でリープクネヒトとともにローザが銃殺され放り込まれたベルリンの運河の黒い水面を今でも思い出す強烈な印象を与える映画であった。こんどの『アンナ・ハーレント』は、ドイツ系ユダヤ人でドイツ占領下のフランスの収容所に拘束され、しかし脱走してアメリカに渡り、第二次大戦後に論壇で大活躍した女流哲学者のストーリーなのだが、それほどの感銘は得られなかったのである。

映画が描こうとした主題は、ナチスのユダヤ人絶滅収容所送りの責任者だった親衛隊中佐アイヒマンが1960年に逃亡先のアルゼンチンで逮捕されイスラエルで裁判にかけられた際に、ハンナが傍聴報告で「殺人に直接手を下したわけではなく、ただ命令に従っただけ」とアイヒマン擁護と取られる主張を行い、強い社会的非難を浴びたことにおかれている。それに自身と夫、それぞれの異性関係が風景的に描かれる。その中には、ハンナが大学時代、師弟関係だった哲学者ハイデガー（後にフライブルグ大学総長 ナチス党员）との情事も含まれる。それらの関係描写に深刻な心理葛藤のドラマがあると言うわけではない。

映画の主題におかれたハンナの主張によれば、ナチスの悪は命令を下したヒトラーら幹部と収容所ガス室のボタンを押した執行吏だけということになる。おかしい哲学だと思う。ハンナの「よく自分で考えよ」という言い方に倣って、第二次世界大戦において、日本軍国主義が2千万人を越す他国の人々の生命を奪った戦争責任の問題を考えてみよう。確かにA級戦犯の加害責任と、命令に服従しただけのBC級戦犯の加害責任は異なる。しかし後者に責任が無いと言うことではないだろう。中国が撫順収容所で戦犯の多くを皇国軍国主義者から戦争の加害責任を認める人間への精神改造を行ったうえで釈放帰国させたことを良く考えるべきだ。

石原都政下で学校式典君が代斉唱に起立しない教員400人が処分されたが、その処分に関わった都教育委員会委員や教育庁職員、あるいは各学校の校長教頭の歴史的責任を考える場合に、ハンナの主張でさばけるのか。九条改憲で海外派遣されて加害者になる自衛隊員の戦争加害責任はどういうことになるのか。この映画を観て、こうした思索をすることは大いに意義あることだとは思ふ。

下山房雄（国分南・やまに平在住）